川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「医者への道」

東高津小学校　６年　小股　雄介

今から五年前、弟がアレルギーの発作を起こした。お母さんがあわてて救急車を呼んだ。

「ピーポーピーポー」救急車の音がだんだん遠ざかっていく。じんましんだらけの弟はつらそうに咳をしながら病院に運ばれていった。

そんな弟の姿をまのあたりにしてぼくは、「弟のような食物アレルギーがある人を救い、気持ちを理解することができる医者になりたい。」と思った。もともとうっすらと医者になりたいとは思っていたが、この出来事を通してぼくの「医者になりたい」という思いはますます強くなった。

ぼくは弟の気持ちを理解しているつもりだった。でも、自分が理解できていたのはほんの少しだった。そのことを痛感させられた出来事が起きた。

先日、ぼくと弟は友達のマンションの下の公園でサッカーをして遊んでいた。そこに一人の友達がきて、みんなにアイスを配りはじめた。でもそのアイスには弟が食べることのできないアレルギー物質が入っていた。弟は正直に「ぼく、これは食べられないんだ」と言った。すると近くにいた友達がひとこと、「ダサッ」と言ったのだ。

弟はきっと、みんなと一緒に楽しくアイスを食べたかったはずだ。弟が悪いわけではないのに馬鹿にされて、ぼくはとてもくやしいと思った。悲しいと思った。でも、一番くやしくて、悲しかったのは弟だったと思う。

今まで弟は、アレルギーで色々なことを制限されてきた。例えば、給食で食べられないメニューがあるときには、一人だけ家からそのメニューのかわりになる食品を持っていかなければいけない。また、子どもだけで参加するキャンプやイベントも、食物アレルギーがあるというだけでなかなか参加することができない。アレルギーがあるだけで、イベントに参加できないなんて理不尽だと思う。ぼくはまず、このような社会を改善していかなければいけないと思う。

「アレルギー」の語源は「奇妙な、変わった反応」という意味らしい。ぼくはアレルギーの謎をといて、このアレルギーという名を変えたいと思う。現在の弟の治療方法は、アレルギーの原因物質を少しずつ食べて原因物質を体に慣らしていき、だんだん量を増やしていくという危険な方法だ。確かにその方法で、弟は食べられるものが増えてきた。でも弟に聞くと時々ぜんそくのような発作がおきて、とてもつらいそうだ。ぼくは、アレルギーの現状は深刻だと痛感した。

現在、アレルギーを完全になおす薬はない。なので、ぼくは医者になり、アレルギーをなおす薬を開発したい。発作の心配をせずに楽しく食事ができるようになってほしい。

ぼくはいつも弟の苦しい体験をそばで見てきた。そのことを思い出しながらアレルギーを持つ人の気持ちを理解し、よりそい、一緒にアレルギーと闘い、笑顔にすることができるような医者になりたい。医者になるという夢を実現させることは決して簡単なことではないと思う。でも、ぼくの努力が人の笑顔を生むと思うと力がわいてくる。たくさん努力をして、「人の心によりそう」医者になる夢の実現に向けて医者への道を歩んでいきたい。